

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

知的障がい者就労支援について糸賀一雄・池田太郎・田村一二の取り組み 戦後黎明期の生産教育から近年の社会的企業まで

著者	宮竹 孝弥
雑誌名	福祉社会開発研究
号	8
ページ	101-110
発行年	2016-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00007742/

知的障がい者就労支援について糸賀一雄・池田太郎・田村一二の取り組み —戦後黎明期の生産教育から近年の社会的企業まで—

障害ユニット リサーチアシスタント
東洋大学大学院福祉社会デザイン研究科博士後期課程
宮竹 孝弥

キーワード：就労支援、生産教育、流汗同労（りゅう
かんどろう）

1. はじめに

知的障がい者への支援において、就労支援は支援の大きな領域を占め論議の続く課題である。現在でも、就労継続支援事業が制度実施に問題があるとして、変更が検討されている。過去の実践を振り返ると、戦後の間もなく設立された入所施設内、地域における共同作業所内、特別養護学校による進路教育でも、就労支援の場が設定されていた。旧知的障害者福祉法には、知的障がい者の就労に関して施設内就労の授産施設を制度化していたが、障害者自立支援法への改正で就労継続支援施設へと姿を変えていく。さらに障害者総合福祉法制定前の専門部会の議論は就労支援の多彩さを示して提案は具体化せず骨子に試行としてまとめられ、今日へと繋がる課題であり続けている。そこで、その知的障がい支援の創世記ともいえる戦後黎明期に入所施設を設置し、就労支援を初めて先駆者たちの取り組みの検討を行った。

2. 創始者たちの就労支援への想い

第二次世界大戦後の混乱期に、まだ福祉の基本法も確立しない時期から、糸賀一雄とその朋友である池田

太郎・田村一二達は、知的障害者の入所施設を立ち上げていった。三人は終戦当時から、「ちまたに放置されたままになっている戦災孤児や家庭でも地域でも見放されている知的障がい児を一人でも多く、そして一日も早く入所させられる施設を作りたい。」と話合った。彼らは初等教育の経験者であるが、近江学園開所前に糸賀は公務員、池田は教員、田村は施設職員であった。戦後の子ども達・知的障がい者への支援から、彼らは施設内での就労支援を重要視し実践を行ってきた。この取り組みを今日の視点から眺めて、収容型の施設を乱立し地域から引き離れた先人と評価し、コロニーへの展開を計画で障害者の自由を奪う活動との彼等への批判が現在では存在する。さらに障がい者は働くことより、社会保障・福祉サービスの充実が必要とする反就労支援の意見もある。しかし、糸賀、池田、田村は戦後の再生への取り組みとして、知的障がい者が働くことを重視し実践を重ねている。京極は糸賀について、「『この子らを世の光に』～糸賀一雄の思想と生涯～」のまえがきで「21世紀の福祉社会へのテイクオフ」を図るには、わが国の20世紀後半の福祉思想家といえる糸賀一雄の思想的遺産を改めて学び返さなければならないと考えたと書いた。ここでは、糸賀一雄を中心に、彼等三人が特に就労支援についての取り組みに注目し、現在の就労支援への繋がりを確認し考察をおこなった。

(1) 糸賀一雄

①支援の姿勢

糸賀一雄（1914-1968）は、「障がい福祉の父」とも称され日本の障害者福祉において重要な実践家である。京都帝国大学哲学科を卒業し哲学的な問いかけを常に持ち続けた。小学校の代用教員を経て滋賀県庁に入庁し、地方公務員の身分のまま、戦後の混乱期の中の1946年に知的障がい児等の入所・教育・医療を行う「近江学園」を創設し園長となった。その後も池田太郎・田村一二の協力も得て多くの入所施設を設立し、実践だけではなく思索を深め、「この子らに世の光を」に表わされる独自の障がい者支援論が代表的な思想として知られている。

障がい者への支援者の姿勢について「まことに私たちははたらくことによって学ぶのでした。そして何を学んだかといえ、この世の役に立ちそうもない重度や重症の子どもたちも、一人ひとりかけがえのない生命をもっている存在であって、この子の生命はほんとうに大切なものだというのでありました。『人間』という抽象的な概念でなく、『この子』という生きた生命、個性のあるこの子の生きる姿のなかに、共感や共鳴を感じようになるのです。」（糸賀.1960）そして「人間と人間が助け合い、受け入れ合う、理解と愛情で結ばれる社会、すなわち共感の考え方に支えられた社会」という、糸賀自らが描いた理想的な社会像の実現に全身全霊を傾けた。

糸賀の人生の最後の講演では、支援者の心の持ちようとして、自身はクリスチャンにも関わらず仏教の「無財の七施」を説明している。支援者は財産が何もなくてもできること「愛は深めていけばいくほど、どこまでもどこまでも深まっていきます。そしてそれは純化されていきます。そのことを私たちは知っておきたいと思います。」とどこまでも当事者への献身を求めている。「私たちの人間関係というものには、『無財の七施』というものがあるんだということを、どっかで聞いたことがあったなあと、思ってくださいればありがたいと

思います。」糸賀一雄氏の言葉から、仏教の無財の七施とは、①眼施（げんせ）人にやさしいまなざしをもって接すること②和顔悦色施（わがんえつじきせ）にこやかなほほえみをたたえた顔で接すること③言辞施（げんじせ）言葉の美しさ、やさしい声で接すること④身施（しんせ）勤労奉仕のこと⑤心施（しんせ）感謝の心⑥牀座施（しょうざせ）席をゆずってあげること⑦房舎施（ぼうしゃせ）一宿一飯の施しということである。糸賀は「『施』は施（ほどこ）しの意である。施しは、字だけ観ると上の者が下の者へ哀れみの情を持って何かをする感じがありますが、仏教では、布施行（ふせぎょう）という行『修行』あるくらい物をあげるのも頂くのも心のあり方が問われることなのです。俗に『物をあげるも上手下手、物をもらうも上手下手』というのも、布施行に通ずることのように思われます。」と語った。そして「この子らに世の光を」を語り始めたこの講演の最中に倒れ、その日に息を引き取り、五十四年の幕を閉じた。東西の思想への探求を通じて、支援者の取り組みを問い続けた糸賀の残した言葉に、その福祉思想を見ることができる。

「福祉の実現は、その根底に、福祉の思想を持っている。実現の過程でその思想は常に吟味される。どうしてこのような考え方ではいけないのかという点を反省させる。福祉の思想は行動的な実践のなかで、常に吟味され、育つのである。」（糸賀.1965）糸賀は実践を研究と同時の行為と捉え、支援の理論化と実践の組み立てに取り組んでいった。

②この子らを世の光に

広く知られる糸賀の「この子らを世の光」の思想は、「『この子らに世の光を』あててやろうという哀れみの政策を求めているのではなく、この子らが自ら輝く素材そのものであるから、いよいよ磨きをかけて輝かそうというのである。『この子らを世の光に』である。この子らが、生まれながらに持っている人格発達の

権利を徹底的に保障せねばならぬということなのである」(糸賀1965)ということである。京極によれば、糸賀は「1.『“障害者”の自己実現・人権』の問題と、2.『個別的な課題と向き合いつつ発達を保障していくこと』と、3.『人びとの福祉意識の変革や福祉社会の実現』という三点を含み込んだ『理念』が『この子らを世の光に』という言葉の中には込められている。」(京極2001)

つまり、糸賀の言う「この子らを世の光に」とは、「この子らが真に輝ける社会に」ということを目指しつつ「確信」を実践的に発展させ、“反省”によって捉えなおしたものを理論化したものが「発達保障」の思想だったと考えられるのである。糸賀は障がい児との親心中が多発する当時の世相に、大きな怒りを持っていた。糸賀の「この子らを世の光に」(糸賀:1965)の記述は「発達保障」という考え方を強調したことと、人ひとりが光り輝く存在であり、「障害」を抱えた人も分けへだてなく共に生きることのできる社会こそ「豊かな社会」であると主張したのである。

③コロニー構想

1950年代初期の糸賀が取り組んだコロニー構想は、生活支援と職業的な自立に向けての拠点となるものであり、「社会への橋渡し」を目指すものであった。この構想の根底には障害児の年長化問題における対策として「アフターケア」施設を整備する意図があった。1948年に施行された児童福祉法により、近江学園などの精神薄弱児施設が規定されたが、適応範囲が18歳未満であること、そして独立自活に必要な知識技能を与えるという目的規定が設けられていた。18歳までに独立自活を果たし、施策が終結する体裁を整えなければならなかったことを意味した(蜂谷2012:107)。

これより糸賀は1950年代に年長児のための「アフターケア」施設として、窯業コロニーの信楽寮(1952年)、女子のためのコロニーとしてあざみ寮(1953年)、農業コロニーの日向弘済学園(1953年)を設立していった。

これらのコロニーは精神薄弱者福祉法整備の制定・改正前で、公的な支援がほとんど得られない中で設立された。糸賀はこれらの施設設置を通じて障がいのある人びとの生活保障の問題を普遍化し、公的な支援を引き出そうとしていたことがうかがえる(三浦1996:77-8、蜂谷2012:105)。

糸賀は「コロニーといっても、その人たちが社会に不適合だからといって単に隔離するのではなくて、社会のはたらきのひとつとしてほかのはたらきと有機的なつながりをもっているものであってほしいわけである。その意味では大きなリハビリテーション(社会復帰)の体系のなかに位置づけられるべきものと思う。むしろリハビリテーション(人間としての形成)といった方がよい。したがって、コロニーが終着駅であったり、墓場であったりするのではなくて、それは始発駅でもあり、人間の育ちという長い営みのなかで、必要なときに与えられる必要な手のひとつであればよいわけである。保護は自立と対立するものではなく、保護のなかにも自立がめばえ育っている。また育てるべきものであろう。その育ちこそ尊いのだと思う。」(糸賀1966:6-7)

また糸賀は自給自足できる生産環境で、教育的な「社会的な人格の確立」(2003:211)をのぞめるコロニーを考えていた。「第一に、法律と社会の仕組みが各人の幸福や利益を、できるだけ全体の利益と調和するように組み立てられること。第二に、教育と世論が、人間の性格に対して持つ絶大な力を利用して、各個人に、自分自身の幸福と社会全体の善とは切っても切れない関係があると思わせるようにすること。」(京極2003)すなわち現在の地域から長期隔絶すると批判されるコロニーとは異なる、糸賀の生活支援の構想を持って、コロニーを志向していったのである。

④重症者の生産教育

糸賀が最終的に行き着いた就労支援の考察では、「重症者の生産教育」の考え方が現れる。糸賀は知

的障がい者の「生産教育」を重要なことと考えていて、糸賀の教員経験が単なる就労ではなく発達期の「生産教育」へ発展させた。その思想は、現在の近江学園の実践にも引き継がれていると思われる。

「この子らはどんな重い障害をもっている、だれと取り替えることもできない個性的な自己実現をしているものである。人間と生まれて、その人なりに人間となっていくのである。その自己実現こそが創造であり、生産である。私たちの願いは、重症な障害をもったこの子たちも立派な生産者であるということを、認め合える社会をつくろうということである。」(糸賀.1965)「重症者の生産教育」の思想は知的障がい者の存在に関わる考察から導き出しているといえる。

さらに生産教育について、「1.精神薄弱児の特殊教育は二つの側面から考察される。その一つは彼らがその属する社会に於いていかなる方法でその適応度を高めるかという主体の側の人格性発達の側面であり、もう一つは彼等が精神薄弱者であるという事実を社会がどのように認識し受容するのであるか、そのことへの働きかけの仕方はどうあるのかという社会の側の認識展開の側面である。もとよりこの二つの側面は別々のことを意味しているのではない。精神薄弱者が職業的社会人となるその形成過程を、教育者の立場から自覚的に問題にするときに、共通の基盤に立つ相互関連的な側面として課題提起されるものに外ならない。」「2.およそ職業を身につけ、独立した人格として社会的役割を担うということは、一般に教育の目的とする理想的人間像である。精神薄弱児の教育も公共社会の職業生活への積極的な自己適応を目的とすることにかわりはない。即ちその社会に於いて何らかの生産に従事しつつ、自らのつくるものの意味を知り、同時にそのような生産人としての自己自身の社会的存在の意義を自覚するようカール・ヤスバースの基本概念を意識したことになることに外ならない。」蜂谷（2015）は、糸賀が「重症児の生産性」や「療育」について語る時はヤスパー

スの「限界状況」という概念が多用されているという。これは、『『この子たちの存在そのものが、自分自身との対決まで私たちを立ち向かわせることに外ならない』言うのである』障がい児の「生産性」や「療育」について語る時は「限界状況」という概念が使用される。このことから支援者の自己との対決が論じられる。

つまり糸賀は、「この子たちの存在そのものが、自分自身との対決まで私たちを立ち向かわせることに外ならない」（糸賀.1965）と言うのである。糸賀は著作や講演において「自己自身との対決」という言葉をよく使った。糸賀の思想の根本は、障害者との共感の世界を持つためには、自分の内面を直視することがいかに大切かという自分自身に対する姿勢そのものであったように思える。「その社会への働きかけは指導者だけの独演ではない。精神薄弱児事態の生活態度や作業態度の改善進歩という事実物語らせるという意味における認識が高められるのである。」「生産的教育が彼等の人格性発達をうながし、さらに新しい社会の形成に作用していく教育的構造の迫及は今後の課題である。」（糸賀一雄「精神薄弱児の生産教育」）糸賀にとって、社会的に排除されかねない知的障がい者の社会的存在の確立に「生産教育」は大きな意義を持っている。

しかし、志半ばで世を去った糸賀の考察は、就労支援については思索半ばで中断されたと言えるかもしれない。「重症者の生産教育」は、蜂谷（2015）の指摘のとおり糸賀の思索の一つの到達点である。「生産教育」と同時に糸賀は知的障がい者への支援として、一方で生活と生産教育を実現させる場としてのコロニーを指向しており、時代の世相との間での糸賀の思索の限界であったとも思われる。その答えは今日の継承者への課題となっている。

（2）池田太郎（1908-1987）

①地域に根差した施設づくり

池田は糸賀一雄の先輩であり、初等教員の後田村らとともに近江学園の設立を進め、当初は知的障がい児ではなく養護施設を担当していた。近江学園の入所者の成長と共に年長児の対応を担当する。池田は、後に近江学園の入所者の一部ために1952年信楽寮（現信楽学園）を設立した。開設当初は地域からの施設反対が強く入所者は外出しないよう求められたりする状態から始まった。さらに1958年民家を借用改造し、授産場を設け独立して窯業による生産教育を始める。そして1959年には畑を購入し、農耕作業による生産教育を始める。池田は施設を地域に開放したり、行事に住民を招いたりして地域に溶け込んでいく。1962年信楽青年寮を開設し、学園長として知的障害児者の職業指導をさらに展開する。1965年に一般家庭に知的障がい者を住まわせ「民間下宿」とする取り組みを、全国で初めて発足させた。

信楽学園の開設とともに、信楽の街にやってきた池田太郎は、知的障害を持つ人たちが人として尊重され、喜びをもって暮らしていくための支援を進めた。職員の育成から始まった信楽学園の立ち上げ、そして全国初の成人を受けとめる信楽青年寮の開設、「民間下宿」の開拓、事業者の協力を得ての就労など、彼らの生活のために地域を取り込んだ先駆的な福祉を実践していった。池田は学園の目標として就労支援を大きく意識した。

「この人達の四つの願いとして、1 働きたい。2 無用の存在でなく、有用の存在であると思われたい。3 皆と一緒に暮らしたい。4 楽しく生きたい。以上の四つの願いがこの人たちの心の底にあると信じる。」池田は働くことが、人間の本能であるかのように、就労支援を園の中心的な目標に置いた。したがって、池田の提唱する四つの願いを叶えることこそ、保護者、関係者（支援者）、地域社会の人々が手をつなぎあって進むべき努力目標になった。また職員に関しては、公平に処遇され、職員の長所は生かされ、職員はこの仕事を通じて、生きがい強く生じていくように努めると掲げた。この目標は、

池田の亡き後を継ぐ現在の法人にまで引き続き掲げられている。

滋賀県が信楽学園設立に際して、陶器工場を買収し出発し、障がい児の職業訓練をより実践的な形で実施した。池田は「信楽学園は、青年期に入ったちえおくれの人たちを一日も早く社会に参加させて、社会自立が出来るようにしたいというので、そのためには生産を通しての教育がよいというので、民家の中にある民間会社を県に買収してもらって出来たものです。」といった。ここに創設者池田の先見性があり、創設当初から生産工場方式というシステムの中で、信楽学園利用者は、自然と仕事と仲間のうずみで成長していく。そして「もう一つの子どもを育てる原動力は、信楽という地域に根ざした、地域社会の理解と協力です。信楽学園利用者は、園内で一定の力をつけた後、町内職場の理解の中で、就労実習をさせて頂き、働く実践力をしっかりと身につけます。」と書かれている。教育者でのあった池田の思考が明確に示されている。信楽学園では陶器作りの過程を実践することで働く力をつけ、町内の陶器工場の理解のもとで就業実習を行い、労働者として街中に巣立っていった。

この信楽学園の工場で作られた陶器は販売され、駅の立ち食い蕎麦の井などが有名であった。また、当時は鉄道では各駅で駅弁が売られていたが、これとセットで販売されるお茶の容器として「汽車どびん」が知られるようになる。その後、プラスチック製品の台頭により衰退したが、最近になり信楽学園から「汽車どびん」復刻版が出されたようである

1969年財団法人から、社会福祉法人しがらき会を設立している。池田の考えた社会福祉法人しがらき会創設の目的は、「知的な障がいのある人たちが、人として尊ばれ、生きる喜びをもっていけるようにするためである。したがって、社会福祉法人しがらき会の運営は、このことが常に優先して考えられなければならない。」この理念の元、精神薄弱者更生施設を設置、許可を受け、

社会福祉法人しがらき会信楽青年寮として新しく出発する。多くの知的障がい者がここで陶器づくりを学び、町内の陶器屋へ勤め、好景気の時は利用者の約3分の2にも上った。信楽青年寮は池田の言葉による目標を掲げ「窯業による職業指導を中心に生産教育を行い、社会生活に必要な基礎教育を施すことによって個人の有する能力を出来得る限り伸長させ、心身共に豊かな人間として成長させる。」池田の言葉には、「障がいのある人が町の中にきてゆくこと。」とある。巣立った当事者は、住み込み就労や結婚・出産する人々も現れ、広く全国の注目を集めた。

信楽においては、通勤寮の開設とその活動が大きな意義を持つ。この「通勤寮」は、就労関連対策として1971年に厚生事務次官通知「精神薄弱者通勤寮設置運営要綱」により、国の制度として設置された。その目的は、精神薄弱者援護施設等を退所した「就労している精神薄弱者を職場に通勤させながら一定期間（原則として2年間）入所させて、対人関係の調整、余暇の活用、健康管理等独立自活に必要な事項の指導を行うことにより、入所者の社会適応能力を向上させ、精神薄弱者の円滑な社会復帰を図る」と示されている。こうして設立された信楽通勤寮は施設から地域への自立支援として、全国の注目を集め多くの足跡を残した。その取り組みは、施策よりは事例からの実践により生み出されており、著作・講演においても事例による説明で強い説得力を発揮している。

池田は「この人達は働くということが本当に好きなのです。何故好きかというと、働くことによって非常に心の安らかさを覚えるのです。又、自分が本当に役に立っているという、人間としての満足感に浸ることができるのです。」（池田1978）後に池田はヨーロッパ視察で現地の知的障がい者の就労する姿を見た後も、日本でも早く青年期に入った知的障がい者には大好きな、働く場所を与え、一人残らず給料が与えられていく働く場所を作らなければならないと考えた。池田は

施設入所の必要がなくなれば早く退所する必要があると考え、地域への生活資源の開発を展開していった。

②通勤寮の終焉

しかし池田の生産教育の実現ともいえる信楽通勤寮は、やがて終焉していった。その経過は「信楽通勤寮の開設、活動、そして終焉（滋賀県障がい者の自立を支える会）」によると、以下のとおりである。

通勤寮の訓練・教育施設で一定期間の勉強を終え、卒寮した後はいろいろなケースが考えられた。卒寮後自宅に帰る、社員寮に入る、民間のホームに入るなどだが、自宅に戻るということは自立に逆行するとも考えられ、通勤寮の自立指導の根本にかかわるところもあった。十分な量の職場の開発は困難な状態であり、一旦就業しても職場への適応が不十分で再入寮という事例も多く、卒寮後の居場所がなくて滞留化という事態が進行することになった。

昭和の初めから平成にかけては利用者の滞留化の解消ということが一つのテーマになった。保護者と話し合い、実家へ帰るということも行われ、受け止める場のない人たちが長期間入寮していた間に蓄えた資金を共同出資してホームを建てるということも行われた。1992年には建物が新築され、信楽青年寮の敷地内から他地区に移転することになった。1994年には女子棟が増設され、異性と接する機会が増えたことは通常の社会生活を営む上での大きな進歩だった。この頃が信楽通勤寮としての最盛期ではなかったかと思われる。

信楽の主要産業である陶器業界に不況の波がじわじわと迫り、町内での職場確保が困難な状況になり、他地域での職場が開発されるに従って寮生の通勤範囲も拡大してきた。1998年ころには100名程度の卒寮生が信楽町内で生活するようになり、就職先や生活の場の確保が困難な状況になってきた。就業状況に合わせて他地域への通勤者が半数を超え、通勤寮が信楽にある意義が薄れ、通勤寮の移転が課題に取り上げられるようになった

2003年の社会福祉構造改革では、施設から地域への移行、在宅福祉重視という障がい者福祉施策が打ち出されて多くの法人、施設が構造改革を迫られた。通勤寮制度も根本から見直され、廃止という方向性が定められた。2005年に障害者自立支援法が制定され、通勤寮廃止の後、その役割を継承する目的で自立生活支援ホームが整備されることになった。そこで、特に信楽通勤寮の場合は全国的にもきわめて特異な活動を展開しており、池田が記録し蓄積された手法は実に貴重なものであった。しかし通勤寮の廃止という施策には抗しがたく、ついに通勤寮廃止の日を迎えた。

現在は信楽青年寮しん・らくとして、活動を継続している。就労面では、造形物研究所、紙漉き、陶器などの、手作り製品の販売、牧場などが行われている。現在も信楽出身の施設長のブログの言葉には、池田の生産教育の思想は受け継がれているといえよう。

（３）田村一二（1909-1995）

①陶芸による就労支援

田村は福祉施設で働く前に教師として、すでに障害児教育のエキスパートであった。戦中に石山学園を創設するが、糸賀一雄に請われて近江学園に転任し、その後一麦寮（現一麦）を創設し、独自の知的障がい児・者との関係を作り出した。その成果を思索して、田村の夢想した理想郷である「茗荷村」の構想を練り上げていった。

近江学園では、田村は窯近江学園窯業科主任として優れた指導者であり、窯業による生産教育を発展させた。竹内（2007）によると近江学園窯業科では田村は、子どもたちに思うままに作らせながら、その間にそれぞれの子どもの作品の傾向を細かく把握し、それを作る子どもの性格も捉えていった。「名人芸」と見える背後で、子どもの作品や性格を非常によく観察し、細かな教育的配慮を持って取り組んでいたという。教師が

先に教えるのではなく、十分時間をかけて子どもたちの自主性に任せて作らせ、それぞれの子どもの特徴を掴む。そしてその上で、子どもたちが作業に飽きないように、ここぞというところで興味付けを行ったり、見本を見せたりした。

近江学園窯業科の教育に影響を与えたのが、前衛陶芸作家の人木一夫であった。八木は、田村が近江学園での窯業教育から一麦寮での粘土の取り組みへと方針や指導方法を転換していく上で、重要な示唆を与えた。当時の学園は、卒業後の自立と社会参加を目指すために、窯業科の取り組みも職業教育としての性格が強く、製品の製作が中心であった。しかし、窯業科の担当であった田村らは、子どもが興味を失わないよう、自由に粘土に触る時間も確保する。すると子どもたちは「だんごのようなもの」や「複雑な形のもの」を作ったり、ひたすら粘土に触るだけであつたりと、思い思いの姿を見せた。田村は、八木が時折話す「子どもの顔が見える」造形に興味を抱くとともに、そうした造形に出会うには、八木の言うように、もっともっと自由にさせなければならないと感じた。彼はこうした八木の考え方や指導に影響を受け、一麦寮に移る頃には、窯業科の方針を大きく変えた。近江学園窯業科で中心としていた製品の生産は行わず、専ら自由に粘土に触らせるようになるのである。（竹内2007）

一麦寮では、重度の知的障がいのある寮生が毎日グループに分かれて、散歩や描画、農耕、掃除、洗濯作業などを行う。毎日の散歩や作業に取り組む寮生たちは、日ごろの想いを貼絵や刺しゅう、絵画等で表現している。1965年から、自由な造詣による遊戯焼と称される陶芸作品を作り始め海外でも評価を得た。（竹内、2007）

田村の創設した一麦寮では、将来の自立を目指して生産教育が重視されており、窯業科も職業教育としての性格が色濃く出ている。田村も、学園卒業後、厳しい社会の中で生きていかねばならない子どもたちの状

況を見据え、実践的な職業教育を行うことの必要性を説いている。その就労は障がい者もその他も共に働き共に汗を流すもので「流汗同労（りゅうかんどろう）」の言葉にしめされた。

②茗荷村建設

田村は1971年小説「茗荷村見聞記」を発表し、この小説は映画界された。それを機に、田村に共感した人々によって廃村の直前にあった年滋賀県愛東町大萩に1982年「茗荷村」が開村した。田村の思いを、共感者は実現するため知的障がいのある人たちと生活を共にした。大津市で「町の中に茗荷村を」と活動していた一家を中心とした11名（障害者3名、村民2名）で歩み出した大萩茗荷村は初め山の中でであったが、山から麓へ近隣の市町村へと広がっていった。

茗荷村では、村是として「1. 賢愚和楽（けんぐうわらく）2. 自然隋3. 物心自立4. 後継養成」の4項を掲げた。田村の思想の特徴は、「遊戯」と村是の「賢愚和楽」という二つのキーワードで読み取ることができる。彼は、子どもたちが「粘土の感触に陶醉し」「無心につぶやき、笑い、遊ぶ」姿を「遊戯の世界」と表現し、そこに障害児の「流露」の発現を見出した。（竹内.2007）それを教育の中心に据えた田村は、それが実現される社会の形を、「賢愚和楽」と表した。これは、障害者があそびの中で生きる喜びを表す姿は、健常者との共同の中で可能なのだということを表している。男女や老若があるように「愚者」と「賢者」とがあり、その「差」はあっても命の尊さに「別はない」。茗荷村運動を通して、だれもが水平につながり合える社会のありようを説き、福祉とはつながりの水平化であり「障がいがある人となない人が水平に生きる」と説いた。（田村.1984）「賢愚和楽」とは「差あって別なし」誰もが存在としては等しい価値があり、福祉は上下の別のないものであるという考えである。

大萩茗荷村は、現在は農業生産法人「(有) 茗荷村同

労会」とNPO茗荷村により鈴鹿の山峡に存在するが、行政単位の“村”ではない。いうなれば、福祉の色合いの大家族であるという。あるいは、さまざまな人達に見守られ励まされながら、障がいを持つ人達と共に生きる村民家族の暮らしを縦糸に、農業生産法人「(有) 茗荷村同労社」や特定非営利活動法人 茗荷村などのさまざまな活動を横糸として、自然に従い自給自足を目指す日常から織り成される総体が大萩茗荷村である。大萩茗荷村では、4ヶ条の村是を指標と仰ぎ、つながりの田村思想、「差あって別なし」「流汗同労（りゅうかんどろう）」などをベースに、共に働き共に学ぶという日々を育み上げてきた。「物心自立」は物質的、精神的にも束縛されない生き方であると田村は説く。田村の講演を聴いた子供の言葉を引用して「働くは“はた”を“らく”にする」ことで他人を楽にすると説いている。（田村.1984）

田村一二の思想は4字漢字熟語による概念説明が取られおり難解な部分も残る。しかし陶芸の指導力を生かして、田村の活動は楽しく働きさらに芸術活動へと繋げる今日への架け橋と言えると思われる。田村のいう「流汗同労」は知的障がい者と支援者の学びあう姿を示していると思われる。田村は1995年86歳で死去した。大萩茗荷村は今日では後継者によって、田村の思想の元に就労支援を継続展開し、就労継続支援と店舗による「社会的企業」を展開するに至り、就労課目もこれまでの陶芸だけではなくパン製造などにも取り組んでいる。

3. 結論

①就労支援を巡る施策の変動

近年の就労支援へ目を転じてみると、就労支援制度の転換は目まぐるしく変化していった。2003年支援費制度が成立し大きく変化した。障害者の自己選択・自

己決定を前提としたノーマライゼーション実現を目指す、社会福祉基礎構造改革の理念を基に導入された制度となる。だが措置から契約への変更などによってサービス利用者が急激に増加し、予算の不足が深刻化したことから財源問題などの理由により、2006年障害者自立支援法へ移行した。この障害者自立支援法に於いては、障害区分認定・自己負担制度などを巡って批判があがり、自立困難法と揶揄されたりしたが、一方で就労支援についての新たな取り組みが評価された。すなわち雇用政策との連携を強化したとされ、新たな就労支援事業を創設したが、これでは自立には不充分とする意見もあった。2013年障害者総合支援法へと移行した。障害者総合支援法への移行前に、厚労省から委託された就労合同作業チームから、「措置制度から契約制度への移行に障害者総合福祉法の骨格に関する総合福祉部会の提言」（2011年）が出された。総合福祉部会の就労合同作業チーム報告書には、就労支援への提言が示されている。すなわち「就労支援の仕組みの障害者総合福祉法における位置づけ」として、就労合同作業チームの結論は、「・障害のある人への就労支援の仕組みとして、『障害者就労センター』と『デイアクティビティセンター（仮称、以下同様）』（作業活動支援部門）を創設する。・社会的雇用等多様な働き方についての試行事業（パイロットスタディ）を実施し、障害者総合福祉法施行後3年をめどにこれを検証する。その結果を踏まえ障害者の就労支援の仕組みについて、関係者と十分に協議しつつ所管部局のあり方も含め検討する。」と記されている。

これは、現行の就労支援制度の中からの取捨選択が難しく苦慮の結果と想像されるが、新制度への具体性を欠いていたのも事実である。就労支援の論議は今日においても、まだ継続中である。

②糸賀一雄・池田太郎・田村一二の3様の就労支援

戦後黎明期における糸賀一雄・池田太郎・田村一二の取り組みは、知的障がい者の支援課題の全てを提示していると言って過言ではない。就労支援においては現代に繋がる開発を取り組んでいた。糸賀一雄は、就労支援については生活の場を収容施設へ依存し地域生活よりはコロニー指向であり、その模索は成熟に至らなかった。しかし糸賀の「重症児者の生産教育」に込めた思いは重要であり、現代への貴重な提言である。糸賀は就労支援は、就労の強制ではなく支援者がどう障がい者に向き合い関わるか思考せよ投げかけている。池田は就労支援を重視し、地域での就労ととの民間ホームの推進は、今日のグループホームの先駆けとなった。就労を足がかりに、施設退所・自立生活への推進を目指した。池田は就労支援は外在化し、地域活動へと発展させた。支援者と障がい者が共に働く様子を池田は「はえあう」と表現した。田村はコロニー形成とは異なる武者小路実篤の「美しい村」に通じるようなユートピア地域建設を夢見た。知的障がい者への就労支援は造詣教育でもあるり、夢想と芸術へのあこがれをも感じる。そしてその田村の就労思想は、継承者たちによって引き継がれ村が活動している。田村の就労支援は今日的な社会的企業の形態に発展し、現代へと受け継がれている。このようにして、糸賀、池田、田村3人は三様に就労支援に取り組み、現代への多様な就労支援の道を切り開いた。知的障害児への光の当て方が三人それぞれに異なるのであるが、糸賀の唱えた障がい者が「世の光」となる事への実現へとむかうであろう、現代の障がい者と歩む支援者に就労支援のパスポートは引き継がれているのである。

（引用文献）

- ・ 蜂谷俊隆（2015）『糸賀一雄の研究』関西学院大学出版会
- ・ 糸賀一雄（1960）『手をつなぐ親たち』
- ・ 糸賀一雄（1967）『福祉の思想』NHKブックス
- ・ 糸賀一雄「この子らを世の光に 近江学園20年の願い」（1965）柏樹社
- ・ 糸賀一雄生誕100年記念事業実行委員会（2014）『糸賀一雄生誕100年記念論文集「生きることが光になる」』

- ・池田太郎 (1978) 『ふれる・しみいる・わびる教育』 北大路書房
- ・池田太郎 (1979) 『めぐりあい・ひびきあい・はえあいの教育』 北大路書房
- ・京極高宣 (2001) 『この子らを世の光に―糸賀一雄の思想と生涯』 NHK出版
- ・京極高宣 (2015) 『障害福祉の父 糸賀一雄の思想と生涯』 ミネルヴァ書房
- ・滋賀県社会福祉協議会編 (2004) 『みんなとちがってみな同じ (社会福祉の礎を築いた人たち)』 サンライズ出版
- ・滋賀県障がい者の自立を支える会 (2015) 「信楽通勤寮について」
http://jiritu-net.sakurane.jp/tuukin_ryou/tuukinnryou.html
- ・竹内理恵 (2007) 「田村一二の二つの障害児教育実践―『流露』発送に注目して」『教育方法の探究』10、京都大学
- ・高谷 清 (2005) 『異質の光―糸賀一雄の魂と思想』 大月書店
- ・田村一二 (1984) 『賢者モ来タリテ遊ぶべし』 NHK出版

(参考文献)

- 池田太郎著作集 (1997) 文理閣
糸賀一雄著作集 (1985) 日本放送出版協会
田村一二著作集 (1971) 北大路書房